

学生が企画・指導する職場体験で 中学生のキャリア意識を向上

富山大学

富山大学では、中学生の職場体験にインターンシップを終えた学生を派遣し、サポートしている。

学生の企画したプログラムで、学生と触れ合いながら学ぶことにより、職場体験が充実。

中学生が大学進学について考える契機にもなっている。

中学での職場体験が 大学に継承されない現状

富山県では、1999年度から県内の全公立中学校の2年生に、5日間の就業体験を義務付ける「14歳の挑戦」を実施している。会社や工場、商店、農業、公共施設などでの職場体験を通して、規範意識や社会性、勤労観を高めることがねらいだ。地域社会全体で若者を育成するという理念の下、中等教育段階のキャリア教育の柱と位置付けている。

ところが、富山大学が2007年に

大学3年生を対象に行ったキャリア意識についてのアンケート調査によると、「やりたい仕事が決まっているかどうか」についての回答と、「14歳の挑戦」による就業体験の有無との間にはほとんど相関がみられなかったという。

キャリアサポートセンターの山田豊主査は、『「14歳の挑戦」は、中学生の自立心や勤労観を養ううえでは効果を上げているが、一過性のものに終わっており、職業選択に向けた視野の広がりや意識の向上につながりにくい。中学校での体験を大学

段階まで発展的に継承させる必要があると感じた」と述べる。

こうした課題をふまえ、中等教育段階におけるキャリア教育との接続を図るために2008年度から始めたのが、「富大流人生設計支援プログラム」だ。同年度に文部科学省の学生支援GPにも選定された。

体験プログラムを 企業と共同で企画

「富大流人生設計支援プログラム」は、①インターンシップ（富山県インターンシップ推進協議会に参加し、2008年度以前から実施）、②事後の就業研修、③「14歳の挑戦」の指導ボランティアで構成されている。インターンシップは、3年次の夏休みに1～2週間実施される選択科目。終了後、中学生を指導するための準備も兼ね、課外活動として、企業の担当者と大学の教職員からインターネット環境を利用した指導を受ける。業種への理解を深める問題を解いたり、ビジネスマナーを学ぶ就業研修だ。そして、同年秋に同じ企業で、中学生の就業体験をサポートする。インターンシップの受け入れ企業の約8割が、「14歳の挑戦」にも参加していることに着目した取

り組みだ。

中学生の支援にあたっては、指導ボランティアとは別に、受け入れ企業と共に体験プログラムを立案し、指導ボランティアの学生を指導するキャリアサポーターも組織する。2～4年生のサポーターが、中学校と企業へのヒアリングによりそれぞれのニーズを把握。それを基に企画を立案し、指導ボランティアと細部のすり合わせを行いながら、プログラムとしてまとめる。2009年度は11人のサポーターが、「富大流人生設計支援プログラム」に参加する企業4社、中学校6校と連携してプログラムを実施した。

ある金融機関からは、中学生の自主性を引き出してほしいという要望があり、金融商品やロゴマークを題材にしたクイズ、店内掲示用のポスターの作製を企画した。また、報道機関では、ニュースに興味を持たせるため、必要部分についての新聞のスクラップを課した。中学生にとって身近でない職業に対するイメージを描かせるために、中学生により近い世代の大学生の柔軟な発想が生かされた。

これらのプログラムに基づき、学生の指導を受けながら仕事について学ぶことによって、中学生にとって職場体験がより密度の濃いものになる。学生との交流を通して、数年後の自分をイメージしてもらうということも期待できそうだ。

キャリアサポートセンターの荒井明准教授は、「中学生にとっては、少し先の大人である学生との触れ合いが、高校進学の先にある将来像を

思い描く機会になる。職場体験を通して学生の働きを見ることによって、それまで大学進学に関心のなかった中学生に進学意識が芽生えるようだ」と述べる。

将来的には、「14歳の挑戦」で学生と接した中学生が富山大学に入学し、「14歳の挑戦」に再度参加して後輩のサポートにあたるという、就業体験の振り返りによる「循環」をめざしている。

学生の課題発見能力を 向上させる機会

「富大流人生設計支援プログラム」は、学生の成長の場でもある。

指導ボランティアを終えた学生は、キャリアサポートセンターの担当者と共に、企業と中学校を訪問。ヒアリングを通して、取り組みの総括を行う。荒井准教授は「学生は『学ぶ立場』から『教える立場』に立つことにより、インターンシップで学んだことや自己の成長を振り返り、あらためてキャリアについて考える機会になる」と語る。

サポーターの学生は、2・3年次の正課科目である「富大流キャリア基礎学習」を受講している。また、ビジネスマナーを含む基礎的なキャリア教育のほか、PBL（Program-Based Learning）によって、リーダーシップやチームワークの大切さも習得。企業・中学校双方のニーズをふまえた就業体験プログラムの企画立案や、指導ボランティアとの共同作業は、課題発見能力や組織における役割認識を育成する。

小中高大をつなぐ キャリア教育を模索

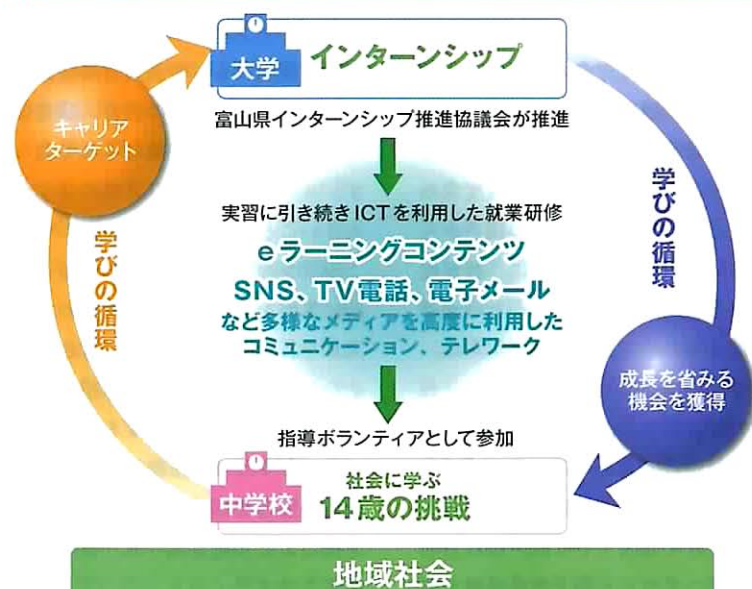
「富大流人生設計支援プログラム」は、「14歳の挑戦」の協力機関の開拓にもつながっている。2010年度には、インターンシップと「14歳の挑戦」のいずれも受け入れていなかった公的機関に、両方の受け入れを依頼、承諾を得た。大学生による中学生支援が評価された結果だという。これまでほとんどが民間企業だったところに広がり生まれた。

富山大学では、学校種を超えた連携を模索する動きも始まった。中学校に対しては、2009年度から「15歳の選択」という交流事業をスタート。キャリアサポーターを中心とする二十数人の学生が富山市内の中学校を訪れ、3年生と勉強、部活、夢の3つのテーマでパネルディスカッションなどを行った。市内の小学校には医学部・薬学部・経済学部の学生が赴き、将来の夢や大学での学びについて講演した。

また、2008年12月には、GP選定の記念事業として幼・小・中・高校の代表者を招いて、キャリア教育の実践について発表し合うフォーラムを開催。山田主査は、「小学校や高校でも有意義なキャリア教育を行っているが、今はそれをつなぐ機会がない。社会に出る前の最後の教育機関である大学には、学校種を超えてキャリア教育の接続を図る大切さを訴えていく責任がある」と語る。

今後、フォーラムに代わる情報交換の場を設け、学校種間の連携をさらに深めていく考えだ。

学校種間で接続・連携する長期循環型インターンシップモデル



出典 富山大学提供資料